

箱入り魔女様のおかげさま

ヴァルト

即位して半年の若き国王。  
魔女など時代遅れだと思っていたが、  
エリカとの出会いで  
少しずつ考えを変える。

エレン

九年前に生き別れた  
エリカの双子の兄。  
何か目的があって  
現れた様子だが……？

ノエル

ヴァルトの従者。  
中性的な美青年で、  
物腰が柔らかい。雰囲気  
がどことなくヴァルトに  
似ている。

ロロン

魔女の家で飼われている  
ウサギ。可愛い外見に反し、  
中身は男前。

エリカ

伝説の魔女と同じ白い髪と、  
琥珀色の瞳を持つ16歳の少女。  
外に出た経験がほとんどない。  
純粋で優しい見習い魔女。

モリー

マリア

ニータ

三老婆

三人のベテラン魔女。  
エリカの育ての親であり、  
魔法の先生でもある。

メーリア

ヴァルトの従姉妹。  
傍若無人な絶世の美女。  
面倒見がよく、  
エリカを可愛がる。



## 目次

第一幕	出会いと始まりの魔法	7	第七幕	再会と災いに挑む魔法	170
第二幕	ウサギと鏡渡りの魔法	31	第八幕	失意ととびきりの魔法	202
第三幕	破壊とまやかしの魔法	51	第九幕	せめぎ合う科学と魔法	228
第四幕	魔女の恩恵と綻 <small>ほころ</small> ぶ魔法	76	第十幕	新しい時代に続く魔法	250
第五幕	大人の階段を上る魔法	103	後日譚	天邪鬼 <small>あまのじやく</small> なウサギの魔法	281
第六幕	過去を上書きする魔法	142			

## 第一幕 出会いと始まりの魔法

びゅうと、突然、強い風が吹いた。

風は木の枝が纏う青葉を騒がせ、地面に茂る黄緑色の草を揺らした。草を一心に食んでいたウサギが、驚いたように顔を上げる。

さらなる風が、ウサギの長い耳をなぶり――

「わっ……ぷ！」

その傍らに立っていた少女の髪も、大きく宙に舞い上がらせた。

彼女の髪の色は、透けるような白であった。

「……ああ、驚いた。今日はやけに風が強いね、ロロン」

少女は髪の乱れを手櫛で整えると、足もとにくっついていた茶色のウサギを抱き上げる。

襟元と袖口にフリルを施した白いブラウスの上に、襟ぐりの深い袖なしのボディスを重ね、膝下のスカートとエプロンという彼女の格好は、この国の伝統的な女性の装いである。

ロロンと呼ばれた雄のウサギは、少女の腕の中で伸び上がって辺りをきよろきよろと見回し、緑の瞳をぱちくりさせた。

ここは、樹齡三千年以上と言われる巨木の頂上付近に作られた空中庭園。

その真ん中に突き出た太い幹に寄り添うように、こぢんまりとした木組みの家が立っている。

少女はこの家で生まれ育った。

「エリカ、そろそろお入りなさいな」

ふいに、家の中から穏やかな老婆の声がした。

少女——エリカ・ヴァルプルガはそれに「はあい、もう少ししたら」と答える。

彼女を育てたのは、今声をかけてきた者を含めた三人の老婆であった。

父親は分からない。母と双子の兄がいたが、十年ほど前に生き別れてそれっきりだ。

ざわざわざわ、と木の葉が擦れ合う音がする。

この空中庭園を支える巨木は、始祖の樹と呼ばれていた。

先ほどの風の余韻で落とされた緑色の葉っぱが、エリカとロロンの上にちらちらと舞い落ちる。

かと思つと、新たに吹いた強い風がそれらを巻き上げ、あつと言う間に遠くに攫っていった。

「下でも、今日はこんなに風が強いのかな……？」

エリカは腕の中のロロンに話しかけつつ、庭園を囲う垣根越しに木の葉の行方を目で追った。

彼女の眼下には、街が広がっている。

空中庭園からは、この国——ヘクセイゼルの全てが一望できた。

ヘクセイゼルは小さな島国だ。

始祖の樹は国のど真ん中に位置し、その真下には国を北と南に二分する大河が流れている。

北側には始祖の樹から放射状に三本の大街道が延び、そこからさらに細い道がいくつも枝分かれしていた。それらの道の隙間を埋め尽くすように、褐色の三角屋根がお揃いの、木組みの家々がひしめき合っている。

そんな景色の中で一際目を引くのが、真北に延びる大街道の突き当たりに立つ白亜の城。ここには、ヘクセイゼルを治める国王が住んでいる。

そして、残りの二本の街道——北西と北東に延びる大街道の先には、それぞれの地域を管轄する市庁舎が立っていた。

対する南側も、南西と南東に向かって大きな街道が延びており、それぞれの先には北側同様市庁舎がある。

南側は北側に比べれば緑地の割合が多く、始祖の樹から真南の位置には大きな山が聳えていた。

エリカが山を眺めていると、ポーツという汽笛の音がかすかに聞こえた。やがて、もくもくと白い煙を上げながら、山の向こうから真っ黒い蒸気機関車が現れる。

線路はヘクセイゼルの外周を囲うように二本作られており、王城と四つの市庁舎の側にそれぞれ駅舎が建てられている。小さな島国なので、一周するには半日もあれば充分だ。

蒸気機関車は右回りと左回りでそれぞれ五台ずつ走っており、一般市民も気軽に利用できる。

しかし、エリカはまだそれに乗ったことがない。

それどころか、今年で十六歳になるというのに、眼下に見える街に下りたことも、片手で数えら

れるほどしかなかった。

「エリカ、早く中に入りなさい」

「はあい、おばあ様」

再び家の中から声が聞こえてきた。さつきとは別の神経質そうな老婆の声に、エリカは名残惜しげに下の世界から視線を外す。

いつの間にか、エリカの周りには何羽ものウサギが集まってきていた。

エリカはそんなウサギの輪の中に、ロロンを下ろす。

「風が強いから、今日は皆も小屋の中にいた方がいいよ」

エリカがそう声をかけると、ウサギ達は大きな瞳をぱちくりと瞬かせた。それから、まるで彼女の言葉に従うように、ぴよこりぴよこりと跳ねて空中庭園の一角にあるウサギ小屋に入った。

ここでは、十羽のウサギが飼われている。

その中で一番年嵩としかきのロロンは、エリカにとって特別な存在だった。彼は仮死状態で産まれたが、当時七歳だったエリカと兄が必死にマッサージをして、奇跡的に息を吹き返したのだ。

人間の友達がないエリカにとって、ロロンは一番の親友でもあった。

エリカを育てた三人の老婆は、始祖の樹全体を統べる魔女である。

エリカ自身も魔女——それも、ヘクセイゼルの始祖たる魔女王ヴァルプルガの再来と言われる、特別な魔女だった。

彼女のように、生まれつき真っ白い髪と琥珀色の瞳をした者は、どこにもいない。

ヘクセイゼルで産まれた子供達が真っ先に聞かされるおとぎ話は、初代魔女王ヴァルプルガの言い伝えだ。それは、こんな物語である。

『今から千年も前のことです。』

魔女がたくさん産まれる、ヘクセンという不思議な土地がありました。

ヘクセンは大陸にある大きな国の領地の一つで、ヴァルプルガはヘクセン領主の一番上の子供でした。

彼女は真っ白い髪と琥珀色の瞳の、美しくて賢いお姫様でした。そして、強い力を持つ魔女でもありました。

その頃、大陸にはたくさん国がありました。

やがて、ヘクセンがある国の王様が、他の国々と戦争を始めたのです。

王様は、ヘクセンの魔女達の魔法で敵の国々をやっつけたいと言いました。けれど、ヴァルプルガのお父様であるヘクセン領主は、魔女達を戦争になど行かせたくありません。

王様は、ヘクセン領主が言うことをきかないのでとても怒りました。怒って、ヘクセン領主を殺してしまつたのです。

お父様が死んでしまったので、ヴァルプルガが新しい領主になりました。

王様はヴァルプルガを自分のお城に呼びつけ、お父様の首を差し出して言いました。

——お前もこうなりたくなければ、魔女達に敵の兵隊をたくさん殺させろ。

ヴァルプルガは、お話は分かりました、と答えました。

そして、数日ほど時間をくださいと言って、お父様の首を抱いてヘクセンに戻ったのです。」

ここまで物語を聞いた子供達は、残酷な王に怒ったり、ヘクセン領主の生首を想像して怯えたり、ヴァルプルガが可哀想だと涙ぐんだりする。

やがて、それからどうなったの、と子供達に先を急かされれば、大人達は決まって少し得意げな顔をして話を話すのだ。

『ヘクセンに帰ったヴァルプルガは、お父様の首の前で泣き崩れる弟や妹達、そして魔女や領民に向かつて言いました。ヘクセンは王様には従わない。魔女には誰も殺させない、と』

だが、それだとヴァルプルガも、父親のように王に首を刎ねられてしまうのではないか。

とたんに心配そうな顔をする子供達に、大人達は「大丈夫」と言って話を続ける。

『ヴァルプルガは、ヘクセンの真ん中であつた始祖の樹に魔女達を集めました。

そしてみんなの力を全て自分に集め、大きな大きな魔法を使つたのです。

すると、領地の隅から隅まで張り巡らされていた始祖の樹の根が、魔女も領民もみんな乗せたまま、ヘクセンを持ち上げて海に運びました。大陸を離れたヘクセンは、海に浮かぶ島国ヘクセイゼルとなり、周りを濃い霧で囲んで王様の目から逃れたのです。

こうしてヴァルプルガは、ヘクセイゼルの最初の魔女王となつたのでした』

実際、約千年前の大陸の歴史書には、ヘクセンという名の領地が一晚にして消え失せた、との記述がある。

ヴァルプルガはヘクセイゼルの民を守つた偉大な魔女であり、今もこの国の人々に深く敬愛されていた。

ヴァルプルガだけではない。今では彼女の血筋のみに、それもごくごく稀にしか産まれなくなつた魔女という存在を、ヘクセイゼルの民は愛し、心の拠り所としていた。

そのため、ヴァルプルガと同じ真っ白い髪と琥珀色の瞳をしたエリカが産まれた時は、ヘクセイゼル全体が魔女王の再来だと騒然となつたものだ。

「わっ……また」

家に戻ろうとしていたエリカは、再び吹いてきた強い風に足を止めた。肩までの髪がまた乱れる。彼女の足もとには池があつたが、ここ半月ほど雨が降らないせいで、水かさが増分減っている。

同様に、始祖の樹の杖の大河も若干水位が下がっていた。ヘクセイゼルは飲料用水を全てこの大河に頼っているため、このまま雨が降らなければ人々の生活にも影響が開始するだろう。

エリカは、はるか遠くの海上に目を凝らす。そこにたゆたう暗い雲の塊を琥珀色の瞳で見つめつつ、ぼつりと呟いた。

「あの雲……こつちに来ればいいのに」

と、その時――

「エリカ、いい加減におし！」

「はあい、ただいまー」

三人目の老婆の鋭い叱責に、エリカは慌てて家の中に飛び込んだ。

それから数時間後。

エリカの願いは叶い、ヘクセイゼルの空に黒い雲がかかり始めた。

そんな中、一台の蒸気自動車が始祖の樹の袂たもとに乗り付けた。

\*\*\*\*\*

三千年以上もの長い間そびえ立つ始祖の樹は、中心部がすっかり朽ちて空洞になっている。魔法やその血縁達は、この空洞の内部を補強し、住居として利用していた。

そんな始祖の樹は今、約二週間後に迫った祭りのために、根元から天辺てんぺん付近まで、ランプを吊るしたロープがぐるぐると巻かれている。祭りの夜には、それら数百個にも及ぶランプ一つ一つに火が灯され、始祖の樹が光り輝くのだ。

始祖の樹は魔法信仰の象徴であるとともに、一部の者にとつては生活の拠り所よきところでもあった。

ヘクセイゼルの社会には極端な貧富ひんふの差はない。しかし、病気や怪我けがで仕事も休やすまらない者や、孤児などといった社会的弱者はどうしても存在する。始祖の樹の下の階には、そんな人々の支援施設があるのだ。

さらに、大きな嵐が来れば海岸近くの住人の避難所となり、病人が訪れば無償で薬を処方し、お産の介助や赤子の名付けも請け負う。

『ヘクセイゼルの民はヴァルプルガの子供達』

それが、始祖の樹での合言葉。

この言葉は、ヘクセイゼルの民は皆がヴァルプルガを祖とする家族であり、家族はいついかなる時も助け合うものだという教えが込められ、遙か昔から受け継がれている。

始祖の樹は、ヘクセイゼルの民にとつて第二の家とも言えた。

ただし、魔法が住まう家と空中庭園——これらをまとめて「魔法殿まじよでん」と呼ぶ——だけは別だ。

魔法殿には、そこに住まう魔法の血縁であろうと、おいそれと立ち入ることはできない。

特に、男性の立ち入りは厳しく禁じられている。それには確固かくことした理由があった。

魔法の魔力の源は女性特有の臓器である子宮にあり、もしも男性と交わりそこに異物をとりこめば、魔力がなくなるといわれている。だから、魔法は未婚のまま一生を過ごす者が多い。かの魔法王ヴァルプルガも、生涯独身を貫いたという。

そんな事情もあってか、今や魔法の存在は稀少きせうである。十六年前にエリカが産まれてから、新たな魔法は一人も現れていないのだ。万が一にも彼女が魔力を失う——つまり魔法ではなくなってしまうようなことがあつては、一大事。

そのため、エリカが普段顔を合わせる男性といえ、魔法と世俗の仲立ちを担になう始祖の樹の管理長の、マリオという老紳士くらい。彼以外の男性と接したことは数えるほどしかなかった。

ところがこの日、魔法殿にある男性がやってきた。

特別な理由で魔法殿への立ち入りを許された彼は、魔法の家のリビングの質素な木の椅子に腰を下ろすと、すっと長い足を組んだ。

それを見て、彼とテーブルを挟んで向かい合うように椅子に座った三人の老婆が眉をひそめる。「こりゃまた、生意気そうな小僧が来たねえ」

憎々しげに呟いたのは、腰の曲がった鷲鼻の魔女ニータ・ヴァルプルガ。なかなか家の中に戻ってこないエリカを、最後に鋭く叱責した老婆だ。

ニータは薬作りが得意で、エリカが小さい頃から熱心に作り方を教えている。

「随分偉そうな坊やですこと」

続いて冷たい目をして呟いたのは、眼鏡をかけたのっぽの魔女モリー・ヴァルプルガ。二番目にエリカを呼んだ、神経質そうな声の老婆である。

モリーはカードを使った占術が得意で、先読みの魔女として名高い。

「僕ちゃんったら、初めての場所で緊張しているのかしら？」

最後に幼子をあやすように言ったのは、ふくよかな体形の魔女マリア・ヴァルプルガ。

エリカに最初に声をかけてきた、穏やかな声の老婆だ。

マリアは優秀な産婆で、数々の難しい出産に立ち会い、多くの赤子を取り上げてきた。

ちなみに、始祖の樹の管理長であるマリオは、彼女の実の兄である。

この三人の魔女も白い髪をしているが、エリカのように生まれつきではなく、加齢によるものだ。若い頃の彼女達の髪は青みを帯びた灰色だったらしい。瞳もエリカの琥珀色とは違い、緑がかかった淡褐色をしていた。

そんな三老婆の友好的ではない言葉に、男は顔をしかめる。

「小僧だのなんだのと……私はもう二十歳を過ぎているぞ」

彼は反論するも、三人の老婆は顔を見合わせてせせら笑った。

「ふん、わしらの三分の一も生きとらん分際で、何を偉そうに！」

腰の曲がったニータは、下からじろりと睨み上げる。

「魔女に威張り散らすなんて、百年早いですわ」

モリーは眼鏡を指で押し上げながら、冷ややかに言った。

「うふふふ、まだまだヒヨコのようなだわねえ」

マリアはそう言って、笑みを浮かべた口元を片手で覆う。

彼女達に馬鹿にされ、男の眉間の皺がますます深くなった。

エリカは、三老婆の後ろに庇われるようにして座らされていた。

彼女は普段着である伝統衣装の上に、フードの付いた白いローブを羽織っている。

この白いローブはヘクセイゼルの魔女の正装で、袖口や裾には金の糸で始祖の樹をモチーフにした刺繍が施されていた。

エリカは椅子の上で小さくなって、三老婆と男の険悪なムードにおろおろするばかり。

すると、そんなエリカの顔を、長い茶色の髪と緑の瞳の男性が横から覗き込んだ。

「ノエルと申します。はじめまして」

「は、はじめまして……」

戸惑うエリカに、ノエルと名乗った男はにこりと微笑む。その顔は中性的で、人形のように整つ

ている。彼は三老婆と睨み合っている男性の付き添いとして、魔女殿への立ち入りを許可されていた。

「ノエルはエリカをじつと見つめたかと思つたら、ふふと小さく笑つて言った。『ヴァルト様がヒヨコなら……こちらの小さな魔女様はまだ卵のようですね』」

ヴァルトというのが、椅子に座つて足を組んだ男の名らしい。ヴァルトは何を言い出すんだという目でノエルを見る。

三老婆は知らぬ間にエリカに近づいていたノエルに眉をひそめ、彼からエリカを引き離す。そんな中、エリカはノエルの言葉をもっともだと思つていた。

ヴァルトという男がヒヨコかどうかはともかくとして、エリカは確かに卵だ。まだまだ半人前な魔女の卵。

髪の毛の白さは潜在魔力の大きさに比例すると言われており、ヴァルプルガと同じ真つ白な髪を持つエリカは、大魔女に成りうる素質があるそうだ。だが、魔女だからと言って、生まれながらに魔法を使えるわけではない。

——魔女は魔女に見出され、魔女に育てられて魔女となる。

エリカはこの十六年間、葉草作りに長けたニータから魔女の葉の作り方を、先読みの魔女モリーからはカードによる占術を教わり、助産を請け負うマリアに付いて数々の出産に立ち会つてきた。しかし、彼女達から学ぶべきことがまだまだたくさんあり、エリカは一人前の魔女とは言い難い。

三老婆の後ろに隠れて、そんなことを考えていたエリカは、突然「おい」と声をかけられた。

はつとして顔を上げると、ヴァルトの視線が真つ直ぐエリカに向けられている。

「その君、名前は？」

突然のことに、エリカはとつさに答えることができない。

そんなエリカを庇うように、三老婆が「気安く話しかけるな」とヴァルトを窘めるが、彼はかまわず「名前は？」と繰り返した。エリカはおずおずと口を開く。

「エ、エリカ、です……」

「なんだ、聞こえないぞ。自分の名くらい、もつと胸を張つて言ってみろ」

ただでさえ馴染みの薄い男性の低い声。その上、まるで活を入れるみたいな大きな声をかけられて、エリカはびくりと竦み上がる。

エリカは泣きたい気持ちになりながら、必死に声を張り上げた。

「エ、エリカ、です！ エリカ・ヴァルプルガですっ!!」

すると、ヴァルトは満足げな顔をして頷く。

「エリカ、か。はじめまして、小さな魔女エリカ」

エリカははつとすると余裕もなく、顔を伏せて挨拶を返すのがやっとだった。

「は、はじめまして——国王様」

彼——ヴァルトは、半年前に即位したヘクセイゼルの若き国王。始祖の樹の真北に位置する白亜の城の、現在の主である。

彼は、ノエルと同じ茶色の髪と緑の瞳を持つ美丈夫だった。ただし、中性的な雰囲気の従者とは

対照的に、男らしい精悍な顔つきで、背が高く身体もがっしりとしている。

男性とほぼ隔離されて育ってきたエリカにとつて、この実に男らしい国王は未知の存在。どう接していいのか分からないし、切れ長の鋭い目や存在感のあるど仏、大きな手足などが、正直言って恐ろしい。

そして、何よりエリカが馴染めないのが……

(ひ、ひげ、こわい……)

国王ヴァルトの尖った顎の先に生えた、髪と同じ茶色の髭だった。

短く綺麗に整えられていて粗暴な感じはないのだが、彼をより男らしく見せてしまうせいで、エリカの恐怖も増す。

そんな彼女の思いを知ってか知らずか、ヴァルトは顎髭を撫でつつ口を開いた。

「知っての通り、現王家と魔女の確執は根深い。だが私は、自分の代でなんとかそれを解決したいと思っっている」

それを聞いた三人の老婆は盛大に眉をひそめ、さらには舐をつり上げて椅子から立ち上がった。

「ならばまず、代々の魔女の墓前に頭を垂れて許しを請え！」

「そうして、偽りの王族を連れて城を出て行きなさい！」

「魔女に、玉座を返すですよ！」

ニータとモリーに加え、普段は穏やかなマリアまで声を荒らげたので、エリカは目を丸くする。一方、ヴァルトは相変わらず堂々と椅子に腰かけて足を組んだまま、淡々とした口調で続けた。

「今さら魔女が玉座に座ったところで何ができる。そもそもヴァルプルガが王と成り得たのは、魔女である前に優れた政治家だったからだ。彼女は魔法で国を治めていたのではない」

千年前、戦争への参加を迫る王から領地ごと海へと逃れ、島国ヘクセイゼルを建国した魔女王ヴァルプルガ。

彼女の死後、偉大な魔女王にあやかろうと、玉座にはヴァルプルガの妹の子孫にあたる魔女達が座り、弟やその子孫である男達が摂政を務める慣習が生まれた。

こうして、魔女王を生み出す家系と、摂政を務める二つの家系が出来上がったのである。

ところが、年月を重ねるごとにみるみる魔女の出生率が下がり、今から五百年ほど前、ついに魔女が一人も産まれない時期ができた。そのため玉座に、長年影に徹していた摂政の家系の男子が座ることになったのだ。

これをきっかけに、ヘクセイゼルは魔女王の治める国から、魔力を持たない男の国王が治める国へ変わった。

この頃大陸では、ヘクセイゼルの前身であるヘクセンが属していた国が、他の大国に吞まれて跡形もなくなっていた。

長年続いた戦乱もすっかり終結し、大陸の国々では経済や産業が目紛しい発展を遂げていた。

かつて大陸と決別したヴァルプルガの意思を継ぐ魔女は保守的だったため、彼女達が玉座にある間、ヘクセイゼルは大陸に対して固く国を閉ざしていた。だが、新たに玉座に就いた男の国王達は、少しずつ大陸と交流し始めた。

大陸との交易により、ヘクセイゼルも飛躍的な発展を遂げた。現在ヘクセイゼルを走る蒸気機関車も、ヴァルトとノエルが乗ってきた蒸気自動車も、大陸から入ってきた技術で作られたものだ。

そして、男の国王はその実績を盾に魔女の家系を始祖の樹へと完全に追いやり、象徴とすること、国政から遠ざけてしまった。

現在のヘクセイゼルは、国王を頂点とし、宰相と数名の大臣、四つの市の市長からなる議会が国政を取り仕切っている。そこに、魔女の席は用意されていない。

ヘクセイゼルは魔女が作った国なのに、男の国王は魔女を蚊帳の外へ置いたのだ。

魔女の家系から見れば、それは始祖たるヴァルプルガに対する冒瀆である。

そのせいで、向かい合って立つ白亜の城と始祖の樹の関係は、もう五百年もの間冷えきったままだった。

それを承知の上で、魔女殿へとやってきた国王ヴァルト。

敵意を剥き出しにする三人の老婆に向かい、若い彼は臆することなく口を開く。

「魔女がどう思おうと、現在この国の内政は安定しており、国民から充分な支持を得ている」

「一方で、始祖たる魔女から王権を奪ったことに対する不信も、根強く残っておりますが」  
嘲りを含んだニータの言葉を否定しないまま、ヴァルトは続ける。

「私は魔女をないがしろにするつもりはないし、歴代の王達もヴァルプルガに対する敬意を忘れたことはなかった」

「よくもぬけぬけと。そんなことは、魔女達の墓前に額を擦り付けて懺悔してからおっしゃい」  
刺すようなモリーの言葉を受けようと、ヴァルトの口調は淀みない。

「ヘクセイゼルの民にとって、ヴァルプルガは特別な存在だ。もちろん、私にとってもそれは同じ」

「あらあらあら、まあまあまあ。魔女を足蹴にしておいて、ヴァルプルガのご加護を受けられるとでもお思いかしら？」

穏やかな口調ながら、マリアの言葉は辛辣だ。

しかし、それでもヴァルトは口を閉じなかった。

「本日、こうしてここを訪れたのは他でもない。ヴァルプルガの再来と言われる魔女の力を見せてもらうためだ」

ヴァルトは、立ち並ぶ三人の老婆の後ろで縮こまっているエリカをじっと見据えて続ける。

「その上で、私は今後、君達魔女とどのように向き合っていくか決めたいと思っている。場合によっては、国政の会議の場に魔女の席を用意するのもやぶさかではない」

彼の言葉に、エリカはおののいた。

国政に返り咲くことは、魔女達の積年の願い。

それが、自分の力如何で叶うかもしれないし、もしくは潰えるかもしれないのだ。

そんな責任重大な役目を、エリカはとてもじゃないが担うことはできない。

ところが……

「今の言葉、忘れるな！」

ニータが叫んで、エリカを強引に椅子から立たせた。

「魔女の席を四つ、用意していただこうではないですか！」

モリーも興奮気味に言って、戸惑うエリカの両手を取る。

「はい、エリカ。よろしくね」

最後にマリアがにこりと笑って、テーブルに置かれていた籠の中からリングを取り、エリカの両掌にぽんと載せた。

「お、おばあ様達……」

そうして、エリカはリングを持ったまま三人の老婆に背中を押され、ヴァルトの前に突き出されてしまった。

彼の鋭い緑色の目が、一挙一動も見逃すまいとでもいうように、エリカにじっと注がれる。

「う……」

エリカはますます緊張し、目がぐるぐると回りそうになる。

今すぐ自分の部屋に逃げ込んで、頭からシーツを被ってしまいたい気分だった。

だが……

「エリカ、その生意気な小僧に吠え面かかせてやりな！」

「あなたの力を見せつけて、尊大な坊やの鼻をへし折っておやりなさい！」

「僕ちゃんったら、きつとびつくりして腰を抜かしちゃうわよ！」

背中にのしかかる三老婆の期待が、エリカに逃げることを許さない。

魔女達の積年の願いを叶えるため、エリカは絶対に失敗するわけにはいかないのだ。

魔法を的確に発動させるには、平常心であることが必須。

エリカはとにかく国王ヴァルトに対する恐怖を克服するため、彼の姿に親しみを覚えられる部分はないかと必死に探した。

（そういえば、国王様の髪……ロロンの毛と色がそっくり。瞳も……同じ緑色だ！）

エリカにとって無二の親友ともいえる、ウサギのロロン。

彼とヴァルトの共通点に気づいたとたん、エリカの目の前がぱっと明るくなった。

（国王様はロロンとそっくり！ ロロンはかわいい！——国王様もかわいい!!）

などと、とても口に出しては言えないような言葉を心の中で唱えるうちに、エリカの気持ちは一気に浮上していく。

「……ほう」

彼女の雰囲気が変わったことに気づいたのか、ヴァルトが組んでいた足を解いた。

エリカは、半人前とはいえ魔女である。

年老いた三人の魔女に師事し、薬を作り、未来を読み取り、命の誕生に寄り添う。

かつてヴァルプルガが駆使したような、土地を動かしたり箒に跨って空を飛んだりなんて、目に見えてすごい魔法は使えない。それはエリカだけでなく、ヴァルプルガ以降の歴代の魔女には、誰一人としてできなかった。



けれど、エリカが持つて生まれた大きな魔力に期待した三老婆は、魔女の家が所蔵する古い文献を読み漁り、試行錯誤しながら彼女を育ててきた。

おかげで、エリカは一つだけ——たった一つだけ、特別な魔法を使える。

「……リンゴをどうする気だ？」

静かに問うヴァルトに答える代わりに、エリカは両手で包み込んだリンゴを顔の前まで持ち上げた。同時に、それまで俯きがちだった顔を上げると、琥珀色の瞳が周囲の光をかき集めるかのよう  
に輝き出す。

腹の底が——魔力の源たる子宮のある場所がカツと熱くなり、まるで血管を伝わるみたいに熱が全身に広がっていく。白い髪が、風もないのにふわりと舞い上がった。魔女のローブの裾もはためき、刺繍の金の糸がキラキラと光る。

そして——エリカの掌に載っていたリンゴが、わずかに宙に浮き上がった。

その光景に、ヴァルトが息を呑む。

「よく見ておれよ、小僧！ エリカの魔法は物体を切断できるんじゃない！」

胸を張ってニータが叫ぶ。するとそれに応えるように、リンゴは突然、ざくり、ざくりと六等分されてしまった。

「繊細に削ぐことだってできるのですよ」

つんと澄ましてモリーが告げる。彼女の言葉の直後、今度はリンゴの皮がじわりじわりと薄く削がれていき、一部を残して床に落とされた。

「小さく抉り取ることだってお手のものよね」

マリアがくすくすと笑って言うのと、リングゴの白い果肉がカリリと抉り取られて穴が空いた。そうして出来上がったのは、なんともかわいらしい、六つのウサギリングゴ。

リングゴをウサギリングゴにする——つまり、魔法でもって物体を加工すること。これこそが、エリカが習得した特別な魔法だった。

「……」

ヴァルトは目を見開いて、無言のままウサギリングゴを見つめ続けた。

そんな彼の様子に、三人の老婆は鼻高々で声を揃えて叫ぶ。

「「どうだ、恐れ入ったかー!!」」

しばしの沈黙があった。

ヴァルトは大きく息を吐き出すと、椅子の背もたれに背中を預けて口を開く。

「……確かに、恐れ入った。——あまりに、くだらなすぎて」

その失望も露な言葉に、今度はエリカが息を呑む番だった。

びくりとした彼女の掌からウサギリングゴが転がり、ぼとりぼとりと床へ落ちる。

三老婆はというと、そんなエリカの後ろで顔を真っ赤にして叫んだ。

「な、な、なんだと、小僧！ 貴様、エリカを愚弄する気かっ！」

「坊やだと思つて甘い顔をしていればいい気になつて！」

「僕ちゃんつたら、お口がすぎるわ！」

しかし、ヴァルトは激昂する老婆達を一瞥した直後、何を思ったのか、テーブルに置かれた籠から新たなリングゴを取り上げる。そして、それを傍らへ差し出した。

「——ノエル」

「はいはい」

リングゴを受け取ったのは、ヴァルトの従者であるノエル。

彼は懐から小型のナイフを取り出すと、ぎよつとしたエリカや三人の老婆の前でリングゴを切り始める。その手さばきは見事なもので、あつという間にウサギリングゴが出来上がってしまった。

それを見届けたヴァルトは長い足を組み直すと、今度は胸の前で両腕を組んで言った。

「見ての通り、今彼女がしたことは、魔女でなくてもできることだ。それをわざわざ魔法でする意味がどこにある？」

「馬鹿か、小僧！ エリカは手を触れずにやってのけたのだぞ！ そんなこと、魔女にしかできないが！」

二一々が唾を飛ばす勢いで喚き立てる。

すると、ヴァルトは椅子から立ち上がり、ノエルのウサギリングゴを一つ摘まみ上げる。

硬直したままのエリカの掌には、ウサギリングゴが一つだけ落ちずに残っていた。

ヴァルトはその隣に、ノエルの作つたものを載せた。

そうして並んだ二つのウサギリングゴは、遜色のない出来映え——とは決して言えない。短時間で仕上げた分、ノエルが作つたものは果肉が白いままだった。

一方、エリカのものは、それこそ彼女と仲良しなロロンの毛のように茶色く変色してしまっていて、はつきり言ってみすばらしい。エリカは自分の掌の上のそれらを見比べ、愕然とした。

ヴァルトはそんな彼女の白い頭を見下ろしつつ、重々しいため息を吐き出す。

「この程度のことをさせるために、魔女として見出された娘が始祖の樹の上に閉じ込められるのだとしたら……私は今後、国王としてそれを阻止せねばなるまい」

「あなた、魔女を滅ぼそうと言うのですか……!?」

魔女が魔女を見出し育てるといふ慣習そのものに踏み込むような彼の言葉に、モリーが全身をわなわなと震わせながら叫ぶ。

ヴァルトは、「いや」と首を横に振った。

「ヴァルプルガに対する敬意は私にもある。もとより、魔女をないがしろにするつもりはない。しかし、魔女もヘクセイゼル国民であり、私には彼女達の自由を守る義務がある」

「魔女は魔女よっ！ 偽りの王が干渉できるものではないわ！」

マリアも声を荒らげて訴える。

しかし、若い国王は三人の年老いた魔女を見据えて宣告した。

「魔女は確かに特別な存在だが、時代の流れはいつまでもそれを許さないだろう。君達はそんな未来に対する覚悟が必要だ」

彼は最後に、蒼白になったままのエリカを見下ろして言った。

「この際はつきりと言おう。——魔女はもう、時代遅れだ」

## 第二幕 ウサギと鏡渡りの魔法

日の入りとともに、ヘクセイゼルの雨が降り始めた。

エリカは自室のベッドに横になったまま、ざあざあという音をぼんやりと聞いていた。

窓の向こうは彼女の鬱屈した心を映したかのような闇に支配されていて、見ていると余計に気持ちが悪くなる。しかし、起き上がってカーテンを引くのさえも億劫で、エリカは仕方なく両目を伏せた。

ところが、顔を伏せると、今度は茶色の髪と緑の瞳の男性——国王ヴァルトの姿が脳裏に浮かび上がる。彼の残像は、エリカを冷たく見下ろし、無慈悲な声で告げた。

——魔女はもう、時代遅れだ。

「……っ」

エリカは喉を引き攣らせ、慌てて両目を開いた。

昼間、従者ノエルとともにやってきたヴァルトは、先ほどの言葉をエリカに告げた瞬間、激怒した三老婆によってたちまち魔女殿から追い出された。

魔女とは言っても、彼女達にはエリカがやってみせたような、手も触れずに物体に干渉する魔法は使えない。よって、ニータはすりこぎ、モリーは箒、マリアはリビングの椅子をそれぞれ振り上

げて、ヴァルトとノエルを文字通り叩き出したのだった。エリカはそんな光景を、掌に二つのウサギリングを載せたまま呆然と眺めていることしかできなかった。

建国千年を数えるヘクセイゼル。始祖たる魔女王ヴァルプルガが結婚も出産もしないまま生涯を終えたため、彼女の直系の子孫というのは存在しない。

ただ、妹が子孫を残しており、魔女が産まれるのは彼女の血筋のみ。その直系に当たるのが、始祖の樹の管理長を務めるマリオと、三老婆の一人であるマリアの兄妹である。

千年の間に魔女の血は薄まりつつヘクセイゼル中に散っていたが、幸い魔女には魔女を見出す力があつた。

エリカは、魔女だった母から産まれた。

エリカの母はもともとはヘクセイゼルの一般市民の娘で、生後すぐに三老婆に見出されて魔女殿に引き取られた。だが、奔放な性格であつた彼女は始祖の樹に閉じ込められることを嫌い、三老婆の目を盗んでは街に降り、やがて未婚のまま子供を身籠つた。

そうして生まれたのが、エリカと兄の双子の兄妹だ。

手塩にかけて育てたエリカの母が魔女でなくなつてしまい、三老婆はひどいショックを受けた。

だが、エリカが魔女王ヴァルプルガと同じ色の髪と瞳で産まれたことで、なんとか気持ちを持ち直したのだ。

エリカは、彼女達がどれほど自分を愛してくれているのかを知っているし、どれほど魔女として

の自分に期待をかけているのかも知っていた——それなのに。

(私、だめだった……)

エリカの魔法を見届けた後の、ヴァルトの失望も露な顔を思い出す。

彼はくだらない、無意味だ、と言つた。

魔法を否定されるということは、エリカにとっては存在意義を否定されるに等しい。

三老婆はヴァルトの言動に口惜しいと憤っていたが、エリカはただ悲しかった。

悲しくて悲しくて、この日の夕食は少しも喉を通らなかつた。それが余計に三老婆を心配させてしまうと分かつていても、エリカは何も口にする気になれなかつたのだ。

夕飯を食べないまま入浴を済ませ、沈んだ顔で就寝の挨拶をしたエリカを、三老婆はそれぞれ懸命に励まそうとしてくれた。それがまた、エリカの罪悪感を募らせた。

「私、どうしたらいいんだろう……」

胸の中に、ぐるぐると嫌なものが渦巻いている。

全身に重い疲労感があるし、下腹は月のものがきた時のようにしくしくと痛む。今日のような魔法を使った時は、いつもこうだ。

エリカはなんだかひどく心細い気持ちも感じ、枕をぎゅっと抱き締めた。

けれど枕は冷たくて、ちっとも心を慰めてくれない。

エリカは、ロロンと一緒に寝てもらおうかと考えた。彼をベッドに入れると毛がつくので、神経質なモリーが怒るのだが、今夜ばかりは大目に見てくれそうな気がする。

すでにウサギ小屋で眠っているかもしれないロロンには申し訳ないが、今から迎えに行こう。  
エリカがそんなことを考えていると……

——コンコン

突然、何かを叩くような小さな音がした。

エリカは最初は気のせいかと思ったが、再びコンコンと聞こえたため、顔を上げる。

音の出所を探ろうと、彼女はきよきよと辺りを見回した。

「えっ……!?」

なんと、雨の降りしきる窓の外に人影があるではないか。しかも、よくよく目を凝らして見れば、それは……

「ノ、ノエルさん!?」

今日の昼に会ったばかりの、国王の従者ノエルだ。

彼は外套を頭から被って、雨に打たれつつそこに立っていた。

エリカはわけが分からないものの、とにかくベッドから飛び起きて窓へ駆け寄った。

慌てて鍵を外し、窓を開ける。すると、ノエルは茶色の前髪から雨を滴らせながら、にこりと微笑んだ。

「どうもこんばんは、魔女様」

「こ、こんばんは……」

始祖の樹では基本的に、日が暮れてからの来客は受け入れない。そもそもこの魔女殿は、魔女に

迎え入れられる形でないと入れない仕組みになっているはずだ。

ノエルはいかにも忍んできたという態で、三老婆の許可を得てきたようには見えない。

エリカはおそろおそろ問いかけた。

「あの……ここまで、どうやって来たんですか?」

「ヴァルブルガの祭りに備えて、ランプの飾りが巻かれています。あれを綱代わりにして、素手で地道に登って参りました」

「えっ!?」

「木登りはけっこう得意なんです」

ノエルはけろりとした顔で、とんでもない答えを返してきた。

エリカは啞然とした。地上から魔女殿までものすごい距離がある上に、この雨である。にわかには信じられない。

なんと答えたらいいか迷う上に、窓を開けたはいいものの、どう対処すればいいのかわからない。そんなエリカの困り顔に、ノエルは苦笑する。

「こんな時間にすみません、魔女様。実は、大事なお話が……」

「はあ……」

「と、その前に。申し訳ないんですけど、ひとまず中に入れてもらえませんか。雨で身体が錆びちやいそうです」

「さ、さび……? えっと、どうぞ……」

「雨に濡れて身体が錆びるだなんて、機械でもあるまいし……と思いつつも、エリカは雨に打たれ続けるノエルが気の毒になって頷いた。

エリカの私室には外に面した扉はないので、窓から入ってもらうしかない。エリカが窓から離れた場所を開けると、ノエルは「失礼します」と一言断つてから、ひよいと身軽に窓枠を飛び越えてきた。とたんに、彼の足もとに水たまりができる。

エリカは慌てて自分の衣装棚からタオルを引っ張り出し、ノエルに渡した。

彼はびしょ濡れの外套を脱ぐと、湿った髪をタオルで拭いつつ、にこりと微笑んだ。

「ありがとうございます。あなたは優しい魔女様ですね」

その柔らかい笑顔と穏やかな声に、エリカは少しだけ落ち着きを取り戻す。

彼女が思わずほっと息を吐き出したとたん、ノエルは左手を腰に当てて長身をかがめた。そして、右手の人差し指でエリカのおでこをつんと突つく。

「若い娘さんが、こんなに時間に気安く男を部屋に入れてはいけません。もうちよつと危機感をお持ちくださいね」

「え、そんな……」

自分が入れると要求したくせに、なんとも理不尽な説教である。

エリカは呆気にとられて彼を見上げているうちに、はたとあることに気がついた。

大人の男性に免疫がない自覚のあるエリカ。

そんな彼女だが、ノエルに対しては国王ヴァルトに感じたような緊張や戸惑い、恐怖心がちつと

も浮かんでこないのだ。それを不思議に思った彼女は、そつとノエルに問いかけた。

「ノエルさんは、その……男性、なんですよね？」

「ええ、一応。脱いでお見せしましょうか？」

「ぬ、脱がなくていいですっ！」

「おや、そうですか？」

慌てて首を横に振るエリカに、ノエルはまたにこりと微笑む。

エリカはその笑顔を眺めつつ、ノエルが平気なのは、彼の容姿が中性的で物腰も柔らかいからなのだろうと考えた。

ノエルは髪を拭い終わると、濡れた外套を綺麗に畳んで小脇に抱える。

そしてエリカに向き直り、改めて口を開いた。

「こうして、無礼を承知で押し掛けたのは他でもありません。実は、僕の主——ヴァルト様に大変なことが起こりました」

「え？ こ、国王様に？」

「はい。一大事にございます」

「はあ……」

ヴァルトの名前が出て、エリカの顔が引き曇った。エリカにとって、彼の印象は最悪だった。できることなら、もう二度と会いたくないというのが本音である。

そんなエリカの前に、ノエルはいきなり片膝をついて跪き、驚く彼女の右手を恭しく持ち上げた。

「魔女様、どうかヴァルト様をお救いください」

「わ、私が国王様をお救いする……?」

「はい、きつとあなたにしかできません」

「私にしか……」

困惑しつつも、これほど真摯に訴えられれば無下にはできない。

「私にしかつて、どういうことですか? 国王様に、何が起こったんですか?」

「なんとご説明すればよいのか……ともかく城にいらつしゃつて、ヴァルト様に会ってください」

「お城に……?」

そう言われたところで、エリカはおいそれと出歩くことが許されない身の上だ。

彼女が魔女殿から下に降りることができるのは、月に一度の行事の時のみ。始祖の樹の外に出ることができのなんて、一年に一度の祭りの夜だけなのだ。

いきなり、国王の一大事だからお城に行つてくるなどと言っても、三老婆が送り出してくれるとは思えない。ただし、それはノエルの方も承知のようだった。

「そもそも、おばあ様方に事情を説明したところで無駄でしょう。昼間の件をまだお怒りでしょうから、問答無用で八つ裂きにさせていただきますよ。僕が」

「だったら、どうやって……」

「内緒で行くんです。大丈夫、一跨ぎでこと事足りますから」

「ひとまたぎ?」

首を傾げるエリカの前で、ノエルは懐に片手を突っ込む。

そうして彼が取り出したのは、手鏡だった。

ノエルはきよとんとするエリカを促して、壁際へ歩いて行く。

「これはね、摩訶不思議な魔法の鏡の片割れなんですよ」

「魔法の鏡?」

壁際には、エリカが身嗜みを整えるために使う、大きな姿見が立てかけられていた。

ノエルはエリカと並んで姿見の前に立つと、その鏡面に手鏡をかざす。

二つの鏡は互いに光を反射し合い、一瞬、ぴかりと強い光を放った。

「——あれっ!?!」

次の瞬間、エリカは目を丸くした。

今の今まで映っていたエリカとノエルの姿が、姿見から消えてしまったのだ。

エリカは慌てて鏡面に近づいてみるが、やはり姿は映らない。

代わりに、そこには見たこともない部屋が映っていた。

「では、魔女様。参りましょう」

「えっ!?!」

なんの説明もないまま、ノエルがにこりと笑ってエリカの手を取った。

彼は戸惑うエリカの手を引いて、先ほど告げた通り本当に一跨ぎ——姿見の縁を跨いで、映し出された部屋へと足を踏み入れたのだ。

「えええっ……!?」

摩訶不思議な体験に、エリカはこれでもかというほど目を見開いた。

姿見を割って通ったわけでもなければ、すり抜けたような感触もない。

後ろを振り向くと、エリカの部屋の姿見とはまた別の、大きな鏡が壁に設置されている。その鏡面に映っているのは、見覚えのある部屋——エリカの部屋だった。

呆然とするエリカを見兼ねたのか、ノエルがやっとこの摩訶不思議な体験の種明かしを始めた。

「これは代々の国王が受け継いできた、ヴァルプルガが遺した魔法具の一つなんです」

「ま、魔法具……?」

「魔法がかけられた便利な道具のことです。魔法の鏡の他にも、ヴァルプルガはいろいろ遺していますよ」

「そう……ですか……」

魔法の鏡は、ノエルが懐から出した手鏡と、二人の背後の壁にかかっている大きな鏡の一对からなる魔法具だそう。持ち運びに便利な小さな手鏡を別の場所にある普通の鏡にかざすことで、大きい方の魔法の鏡と繋ぐことができるらしい。

そして、この大きな鏡があるのは王城、しかも国王が私的な時間を過ごす居室だというのだ。

「国王様のお部屋……」

とたんに、エリカは緊張し始める。自分の魔法をこき下ろした、あの顎髭の国王と再び会わねばならないのかと思うと、とてつもなく気が重くなった。

しかし、ノエルはエリカの手を引いて、有無を言わず歩き出す。

部屋の奥の扉を開けると、向こうは寝室だった。

寝室の奥には、国王ヴァルトのものと思われる大きなベッドが置かれている。

ところが、その上にいるのは……

「あ、あれ……? ウサギ?」

茶色の毛並みと緑色の瞳——ロロンと同じ色合いのウサギが一匹、ベッドの上に鎮座していた。

エリカはしばらくの間、琥珀色の両目をぱちくりさせてそのウサギを眺める。

やがて、突然顔を青ざめさせ、ノエルに向かっておそるおそる尋ねた。

「あの子……もしかして、国王様のお夜食ですか?」

彼女がそう言う指差したウサギは、子やぎほどの大きさがあった。

ヘクセイゼルは国土が狭く、農耕や牧畜に利用できる土地もそう多くはない。南側の大きな山の周囲に緑地が広がっているが、そこは主に農業用地として使用されている。そのため、広い土地

がなくても飼育でき、繁殖力が非常に強いウサギを、魔女王の時代から貴重なタンパク源としてきたのだ。

そして千年の間に、より食用に適するように改良に改良を重ね、生後一年を待たずに子やぎほどの

大きさまで成長するウサギが生み出されていた。国王のベッドにいたのは、その大型のウサギだ。

エリカの質問に、ノエルは肩を竦めて苦笑する。

「いくらヴァルト様がガッツリ肉食系に見えても、さすがに寝室で生きたウサギを貪り食ったりし

ませんから」

ヘクセイゼルでは、ウサギといえばこの食用の大きなものを指し、たいていのヘクセイゼル人はウサギを見ると、「かわいい」ではなく「おいしそう」と言う。

「ところで、その……国王様はどちらに？」

寝室の中には食用ウサギが一匹いるだけで、ヴァルトの姿はない。

エリカがきよるきよると辺りを見回しながら彼の所在を問うと、ノエルは大きなため息をついた。そして、すつと片手を持ち上げてベッドを指さす。

「あちらです」

「え？ どちらですか？」

「ベッドの上でふてぶてしい顔をしているでつかいウサギ——あれがヴァルト様ですよ」

「……は!?」

ノエルの言葉にエリカはポカンとして、再びベッドの上の食用ウサギを見つめた。

確かに、その毛と瞳の色はヴァルトの髪と瞳と同じだが、それだけだ。ウサギをどれだけ眺めても、昼間会った国王には到底見えない。

わけが分からないと言いたげなエリカの顔を見て、ノエルはもう一つため息をついた。

「太陽が沈むとともに、いきなりあの姿におなりあそばしたんです。僕の目の前で起こったことで、僕が保証します。あれは間違いなくヴァルト様ですよ」

「えええっ……」

「人間をウサギに変えてしまう——そんなことができるのは、魔女だけでしょう？」

「——っ!？」

ノエルの言葉に、エリカは息を呑む。次いで蒼白となり、ぶんぶんと首を横に振って叫んだ。

「ち、違います！ 私、何もしてません！ 人をウサギにする魔法なんて、知りませんもの!!」

「はいはい、どうぞ」

混乱するエリカを宥めるように、ノエルは彼女の肩を優しくとんとんと叩いた。

それから長身をかがませてエリカの顔を覗き込むと、落ち着いた声で話しかける。

「ご安心ください。魔女様が悪意を持ってやったなんて、僕も思っておりませんよ。ただ、何か思い当たるようなことはありませんか？」

——たとえば、リングゴを魔法でウサギの形にする際、ウサギを強くイメージし過ぎたとか。

そう問われ、エリカははつとあることを思い出した。

「ま、魔法を使う前なのですが……」

「はっ」

「国王様のことをロロンに……うちのウサギに似ていると思ってました」

「なるほど」

エリカの言葉に、ノエルは合点がいったように大きく頷いた。

あの時、とにかくヴァルトが怖くてならなかったエリカは、彼をウサギに似ていると思いつくまで、なんとかその恐怖心を抑え込もうとしたのだ。

そんな説明を聞いたノエルは、エリカのその自己暗示が魔力と反応し、ヴァルトをウサギに変える魔法を組成してしまったのではないかと分析した。

「ヴァルト様がすぐにウサギにならなかったのは、意識してかけた魔法ではなかったからでしょう。不完全な魔法では陽の気には勝てず、日が沈んで魔力が強くなるまで効果が抑えられていたのかもありません」

「ノエルさんは、魔法について詳しいんですね」

エリカが感心しながら口にした言葉に、ノエルは「ええまあ」と曖昧に笑う。

そして、気を取り直すかのように、両手をパンと打ち鳴らした。

「さて、とりあえず僕は魔法についての文献でも漁ってきますね」

ヴァルトがウサギの姿になったのは、十中八九エリカの魔法のせいだろう。しかし、意識してかけたわけではない上に、そもそも魔法の解除の仕方などエリカは知らない。せっかく呼ばれたものの、役には立てなさそうだ。

自分の不甲斐なさに、エリカの気持ちはまたもや沈んでいく。

ノエルはそんな彼女を元気づけるように、ぼんと肩を叩いて言った。

「魔女様には、ヴァルト様をお任せします」

「えっ、任せるって……?」

「見ての通り、ヴァルト様はただいま無力な食用ウサギです。誰かに見つかって丸焼きにされてしまわないように、どうか守って差し上げてください」

ノエルはそう言ってエリカを寝室の中へ押しやると、自分は居室の方に出て扉を閉めた。

そして扉越しに、鍵をかけておくようエリカに告げる。

エリカは戸惑いつつも、言われるまま扉に鍵をかけた。

寝室の中にはエリカと、ヴァルトだという食用ウサギだけが残された。

扉を見つめていたエリカは、ゆっくりと後ろ——ウサギがいるベッドの方を振り返る。

ヴァルトと思しきウサギは、最初にエリカとノエルが寝室に入ってきた時とまったく変わらぬ体勢で、そこに鎮座していた。

今の彼には、エリカが昼間会った、髭を生やした精悍な男性の面影はない。

彼は何も言わない。ウサギが人語を話すわけがないのだから、当然といえば当然なのだが、どうにも気まずい。ただ緑の瞳にじっと見つめられ、エリカはいたたまれない気持ちになった。

「……国王様、その……ごめんなさい」

扉の前に立ったまま、エリカはウサギに向かってペコリと頭を下げる。

意識してやったことではないとはいえ、ヴァルトに迷惑をかけてしまったのだ。

エリカは唇を囁みながら、震える声で続けた。

「国王様が昼間おっしゃった通りです。私の魔法なんて、本当にくだらない。おばあ様達の役にも立てない……」

それは、エリカがずっと思っていたことだった。

自分は、なんのためにいるのだろう。この先、いったい何ができるというのだろうか。

ヴァルプルガの再来ともてはやされてはいるが、かの偉大な魔女王にあやかれたのは、髪と瞳の色だけ。ヴァルプルガのようにヘクセイゼルを守る力なんてないし、自信もない。

それでも、せめて三老婆の期待にだけは応えたかった。

——ポン、ポン

その時、何か柔らかいものを叩くような音が聞こえてきた。エリカがのろろと顔を上げると、またポンポンと音が響く。

それは、ウサギの姿をしたヴァルトが、前足でベッドを叩いている音だった。ここに来い、と言われていた気がして、エリカはそろそろとベッドに近づく。

彼女がベッドに腰を下ろすと、ウサギはやつと叩くのをやめた。

かと思ったら、今度は後ろ足で立ち上がり、エリカの肩に前足を引っかける。

そうすると、子やぎほどの背丈があるウサギの目線は、ベッドに腰掛けたエリカと同じになった。

ウサギは至近距離から、人間の時の鋭さはない緑の目でエリカの顔を覗き込む。

ポンと片方の前足を頭に載せられ、エリカはウサギが自分を慰めようとしてくれているのに気づいた。

ウサギに頭を撫でられるなんて相当おかしなことのはずなのに、悲しい気持ちの方が強くて笑えない。

「国王様、お願いします。どうか、私達魔女をこのままそつとして置いて……」

エリカは震える声でそう告げる。目にはみるみる涙が溜まり、ウサギのヴァルトの姿も滲んでしまう。エリカは無様な泣き顔を見られたくなくて、目の前の毛玉をぎゅっと抱き締めた。

柔らかな茶色の毛は、少し獣臭いロロンのそれとは違い、清潔な石鹸の香りがした。

ふいに、エリカの身体がぐらりと傾ぐ。

ノエルが訪ねて来る前に感じていた強い疲労感。それがまた、一気に彼女の身体にのしかかってきたのだ。

エリカはウサギを抱き締めたまま、ぼすりとベッドの上に倒れ込む。ぴたぴたと、ウサギの前足らしき柔らかなもので頬を突かれたが、瞼が重すぎて抗うことはできなかった。

容赦なく眠りに引きずり込まれる間、エリカは縫るように腕の中の温もりを抱き締める。

「私の居場所を奪わないで……」

エリカの呟きは、果たして言葉になったのだろうか。

柔らかい茶色の抱き枕が何者であるのか、この時の彼女にはもう分からなくなっていた。

\*\*\*\*\*

「ん……う……」

チチチチ……と、小鳥のさえずりが聞こえた。

瞼の向こうに明るい光を感じ、エリカは朝の到来を知る。しかし、まだとても眠くて、瞼を開く

のが億劫だった。

三老婆は朝日が昇るとともに起き出すのが習慣だが、エリカにまでそれを強制することはない。あまり遅くまで寝ていると上掛けを引き剥がしに来るが、彼女達が廊下や庭を掃いて回る気配がないし、もう少し微睡んでいても問題ないだろう。

そう思ったエリカは、心置きなく二度寝を敢行しようとした。

「うう……ん……？」

ところが、今朝はどうにも枕がしつくりこない。ごつくて、硬くて、幅広で、いやに温かい気がするのだ。

そこでエリカはふと、昨夜はウサギを抱いて眠ったことを思い出した。

それが腕の中で身じろぎするのを感じる。ロンンにしては随分大きいような……と思いつつも、彼女の額は頑に閉じたままだ。

エリカは手に触れた毛をわしゃわしゃと撫でると、「もうちょっとだけ」と呟いて、ウサギはずの何かを抱き締め直した。ところが……

「ん、う……？　チクチクする……」

エリカは顔をしかめて唸った。抱き枕代わりのそれと触れ合う頬に、刺されるような感触を覚えたのだ。ロンのふかふかの毛とは違い、随分と硬くて肌触りがよくない。

訝しく思ったエリカがようやく眼を上げてみれば……

「……おはよう、小さな魔女」

目の前には切れ長の緑の瞳。エリカが驚掴みになっているのは茶色の毛髪。

そして、エリカの頬をチクチクと刺激するのは男性の——国王ヴァルトの鬚髭だった。

「——っ!？」

「うわっ！　こらっ……しー!!」

とっさに悲鳴を上げようとしたエリカの口を、ヴァルトが慌てて塞ぐ。

「うー！　うー!!」

「待て！　待て待て、落ち着け！　今この状態で人が来たら、あらぬ誤解を受けかねん！」

焦った声で言うヴァルトは、よく見れば服を着ていない。

彼は昨夜、エリカの魔法によってウサギに変化させられていた。その際、衣服が全て脱げてしまったのだろう。

独身の国王が全裸で魔女と寝ていた——なんてことが周囲に知られれば、確かに一大事。エリカは自分の口を覆う大きな掌にドギマギしつつ、なんとか悲鳴を押し殺す。

ところが、その時。

——ぐうう……

悲鳴の代わりに、エリカの腹が盛大に鳴いた。

昨夜、傷心のあまり食事が喉を通らず、何も食べないまま私室に籠ったせいだろう。

大声で空腹を主張する腹の虫に、エリカの顔はみるみる赤く染まっていく。

「——っ!？」

ふいに、ヴァルトが嘔き出した。彼はエリカの口を塞いでいた手を離すと、腹を抱えて笑い出す。「はははっ……なんだ、君。腹が減ってるのか？」

「……っ！」

エリカは恥ずかしくてたまらず、くるりと背中を向けて膝を抱え込んだ。そんな彼女の白い頭を、ようやく笑いを収めたヴァルトの手がぼんと撫でる。

エリカはびくりとしつつも、おそるおそる膝から顔を上げて背後を振り返った。

ベッドから立ち上がったヴァルトは、側の椅子にかけてあった寝衣用らしきローブを纏って言う。

「朝食にしよう。君とはいろいろ話さねばならん」

「……あの、でも……帰らないと」

「昨日は日が落ちたと勝手に仕事ができなくなったのな。予定が狂って私も忙しいんだ。今しかゆっくり話す時間が取れん」

「は……はい……」

昨夜、ヴァルトが仕事をできなくなったのは、エリカの魔法でウサギになってしまったからで——つまり、彼の予定が狂ったのはエリカのせいなのだ。

エリカはあまりの申し訳なさに、しゅんと俯くしかなかった。

そんな彼女の頭を、ヴァルトの手が宥めるようにぼんぼんと叩く。

「いいから、食っていけ。腹を空かせた客人をそのまま帰したとなれば、私の沽券に關わる」

腹の虫が鳴いたことを蒸し返されて、エリカはまた頬を赤らめ——それから少し唇を尖らせた。

### 第三幕 破壊とまやかしの魔法

「おはようございます。昨夜は随分いい思いをなさったようですね」

寝室を出てきたエリカとヴァルトの顔を見るなり、ノエルがにこりと笑ってそう言った。

どういう意味だろうと首を傾げるエリカの横で、ヴァルトは「誤解を生むような言い方はやめろ」と彼を睨む。

しかし、ノエルは笑みを深めて続けた。

「だって、お二人ともよくお眠りになられていたようでしたから」

その言葉に、エリカは確かにと頷く。ヴァルトも否定はしなかった。

昨夜のエリカはひどく疲れていたし、ヴァルトも魔法で姿を変えられて平素と違った影響か、一緒にベッドに転がった後はすぐに眠りに落ちて、朝までぐっすりだった。

おかげで、沈んでいたエリカの心もいくらか回復し、空腹を感じる余裕も出てきた。

きゆう、とまた小さく腹の虫が鳴いて、エリカの顔が熱くなる。

「くく……」

ヴァルトが肩を揺らして笑いながら、ノエルに命じた。

「早急に、この小さな魔女に腹ごしらえをさせろ」